

# 横光利一ある夜の拍手

鈴木 貞美

旧「満州国」で「芸文」と

いう国策総合雑誌が出されて  
いた。一九四二年に創刊、官  
僚、軍人や建国大学教授、新  
聞社主や文化団体関係者な  
ど多彩な顔ぶれの人ひとが寄  
稿している。中国の研究者と  
協力して復刻作業をつづけて

いるが、対米英戦争期の「満  
州国」の事情が手にとるよう

にわかる。

誌面では「大東亜共栄圏の  
模範たれ」と関東軍広報部長  
が号令をかけている。「民族  
協和」が強調され、「それな  
ら」と中国人作家も活発に書  
いている。このあたり、あま  
り知られていないと思う。

「芸文」は、戦時の体制再  
編にともない、一九四四年に  
再出発する。七月号

から満州文芸春秋社  
が版元となり、芸  
文誌に変貌をとげる  
と、日本の文壇から  
も寄稿を受けるよう  
になる。

その七月号には、  
川端康成が自ら参画  
した「満州各民族代  
表作選集」について  
書き、若いころの芝  
木好子の満州訪問記  
も載っている。その  
後も佐藤春夫や武者  
小路実篤らの寄稿が  
つづく。カットは、  
このころ渡満した芹

沢銚介。あの民芸調の版面が  
誌面を飾っている。

その九月号に、中国文学の  
吉川幸次郎が元時代の戯曲に  
ついて書いた随筆とならん  
で、横光利一の「ある夜の拍  
手」が載っていた。約五千二  
百字の満州回想記だが、足か  
け五年にわたって長編「旅  
愁」を書きついできた彼の心  
境をよく映している。

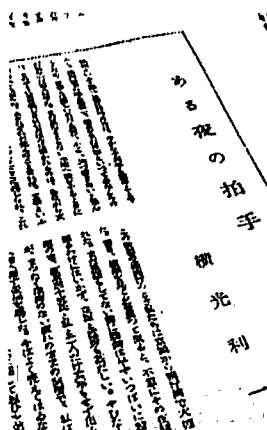
一九三〇年秋に満鉄の招き  
で菊池寛らと満州を訪問した  
ときの思い出から筆を起こ  
し、講演で史的唯物論の批判  
をしたら、白い手の拍手を受  
けた、それが忘れられないと

書いている。拍手の主は、ソ  
連からの亡命ロシア人、それ  
も女性と想ってよい。

それからちょうど一年後  
に、満州事変が起きた。横光  
は何か運命的なものを感じた  
にちがいない。このタイトル  
には、その白い手の拍手に、  
ずっと鼓舞されてきたという  
思いがこめられているよう。

横光利一は、マルクス主義  
に敏感に反応した作家であ  
る。商品の値段と実際の価値  
とのギャップから資本主義の  
マシクを暴いたマルクスと  
張りあうように、物や金、人  
の心の動きを機械仕掛けの現  
実として描き、風刺するのを  
本領とした。「旅愁」では、  
ヨーロッパの知性の混乱に対  
して、日本精神をテーマにし  
た。その裏側には「金銭を不  
潔と見る東洋精神」が潜んで  
いたことを、このエッセイは  
よく明かしている。

だが、横光が「満州国」に  
見たのは、精神でなく、「整  
頓された知性」だった。一九  
三六年、ヨーロッパ旅行の機  
りにハルビンに立ち寄ったの  
が、彼の二度目の満州訪問に  
なる。「王道楽土」「民族協  
和」の旗を掲げて出発した



雑誌「芸文」一九四四年九月号に掲載され  
ていた横光利一のエッセイ「カット」。右  
は同年七月号の実物(日本近代文学館蔵)

## 「満州国」の 知性に見た夢